

blood news

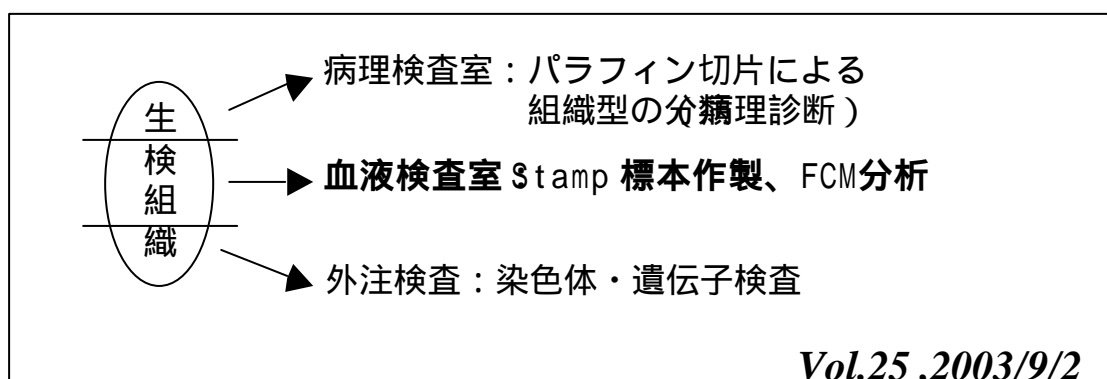
今月のテーマ

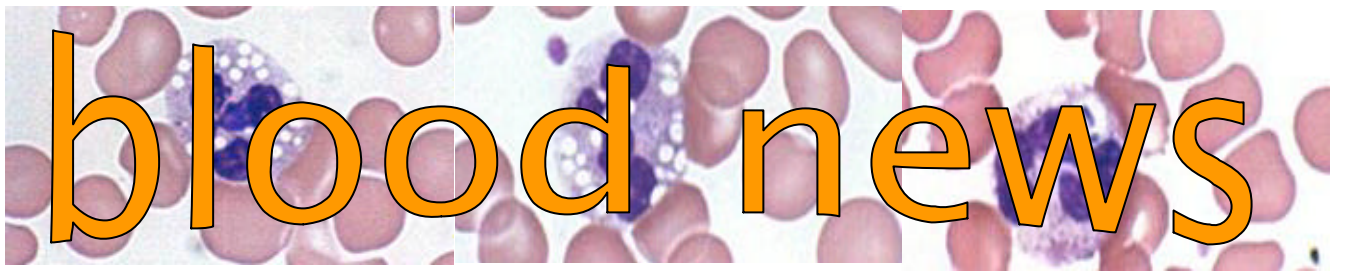
悪性リンパ腫（第一報） 生検材料の検体処理について ”

悪性リンパ腫はリンパ球がリンパ節、リンパ細網組織あるいはリンパ節外性に腫瘍性増殖する疾患です。悪性リンパ腫は大きくホジキン病と非ホジキン病に分けられ、非ホジキン病はT細胞性、NK細胞性、B細胞性に分類されています。今回の blood news は、第一報で悪性リンパ腫疑い生検で採取された検体の処理について、第二報では血液検査室で行われている検査についてお話しします。

採取検体の処理

発熱・体重減少・夜間盗汗・表在リンパ節腫脹などの身体学的所見に加え、生化学検査的にLDH、可溶性IL-2受容体値の上昇など悪性リンパ腫が疑われた患者は外科的にリンパ組織が採取されます。組織が採取されてから、診断までのプロセスを図1に示します。採取された組織は3分割され、それぞれ病理検査室、血液検査室、外注検査用に分けられます。病理検査室ではパラフィン切片を作製し、病理組織診断用に標本が作られます。外注検査では染色体検査、あるいは遺伝子検査を行います。





blood news

血液検査室の検体処理

採取された検体をスライドガラスに捺印し、ギムザ染色で染色した標本を観察します。同時に FCM 分析用に検体を処理します。現在悪性リンパ腫などのリンパ球系腫瘍の診断には、FCM 分析が必須となっています。FCM 分析では腫瘍細胞の起源 (T,NK,B 細胞性) を確認したり、特異抗原の発現をみることにより、一部の組織型決定の補助的役割を担っています。

捺印標本、FCM 分析を行うにあたって採取検体は、生の状態 (未固定) で処理しなければなりません。従って検体を滅菌生理食塩水で湿らせたガーゼで覆い、乾燥させないで提出する必要があります。また染色体や遺伝子検査も未固定検体で、滅菌状態のまま検査を行う必要があります。

採取検体の適切な処理と分析を行う為に、悪性リンパ腫が疑われた患者に対しては、血液内科に御相談のうえ、生検予定日、患者情報などを前日までに検査室へ御連絡ください。